

市議会議員5人の 議会活動に関する ご報告

共同
発行人



A・増田好秀



B・越川まさみ



C・湯浅止子



D・長友正徳



E・秋本のり子



共同発行人のご紹介

私たち5人の市議会議員(湯浅止子、秋本のり子、越川雅史、増田好秀、長友正徳)は、市議会会派・「無所属の会」を結成し、特定の政党・団体の利害にとらわれることなく、議案や予算の審査を行うとともに、さまざまな市政課題に関する調査・研究に取り組んでおります。今回は任期半ばの中間報告として、本誌を共同発行致しました。各議員の想い、活動の様子が窺えますので、ご一読いただければ幸いです。

自殺者0人の社会を目指して

年始に40代の女性から口頭でお礼を言われました。「私の命を救っていただき、本当にありがとうございます。」女性は住民税の滞納等のため、給与を差し押さえられました。そのため、昼間の仕事とは別に夜間の仕事も頑張つてしまい、体調を崩し、精神的にも不安定になりました。結局、それを契機に生活状況がさらに悪化してしまいました。自殺を考えた事もあったそうですが、7年前からのライフワーク、日中に皆さんのお宅を伺い、困り事や意見を伺う活動の際に相談いただき、役所のそれぞれの担当課の方たちの力を借りて問題を解決できました。いろいろな調査活動をしていますが、これに勝る活動はありません。「市川市は30・40代の自殺者数が多い。ならば、直接、出勤時等に相談窓口を周知するのが効果的」と思い、人の集まる駅等で活動を続けています。議会では特に、2年前、4年前、6年前に『市川市は、自殺の原因や背景に規則性がある』という仮説をお伝えし、自殺統計原票をもとに分析をし、市川市独自の対策を立てることの大切さをお伝えし、市川市の自殺対策はこの分野でも少しずつ前進しています。そして、いろいろな市の活動も相まって、30・40代の年間自殺者数が減らす事ができました。しかし、10・20代の自殺者数が増えており、毎年80人の人が自殺で亡くなっています。自殺者の方は、死にたくて死んでいく訳ではないのです。抱えている問題が重いから、逃れたいから死んでいくのです。生きるための支援をしたいです。「誰も自殺に追い詰められる事のない社会」そんな市川市を実現します。

(文責A・増田好秀)

高校中退防止と中退者支援の必要性

昨今、「子どもの貧困」という言葉が目立ってきておりますが、市議会議員としてこれまで取り組んできた視察や調査・研究を通じて、世代をまたがった貧困の連鎖を防止する観点からは、高校中退を防ぐとともに、中退者を支援することが重要であることが分かりました。なぜならば、雇用の面では正社員のみならず、パート・アルバイトとして働く際にも高卒資格(または在学中)が求められるケースが多いことから、中退することで就業へのハードルが一気に高まってしまい、将来において経済的に自立した生活を送ることが容易でなくなるからです。中退に至った過程は多種多様であり、確かに中退という言葉には、自己責任といった響きも感じられるところですが、多くは家庭環境との相関関係が見られることがさまざまな研究から明らかになっております。また、ご本人の問題に止まらず、社会保障支出の増要因にもなり得ることから、本市が行政課題として認識し、対策を講じていくべきだと考えました。そこで、私は先の2月定例会の代表質問にてこの問題を探り上げ、「就労の場合を除き、本市は中退者の支援を実施していないこと」「県レベルでも、本県は取り組みが脆弱であること」を指摘した上で市の認識を質し、「本市においても課題であると認識している」「実態を調査する」といった旨の答弁を引き出すことができました。いわゆる貧困問題は、義的には国の仕事ですが、子どもたちが社会に巣立つための支援には本市も積極的に取り組むべきです。皆さまのご意見・ご相談の声をお寄せください。

(文責B・越川雅史)

百条委員会の詳細を知りたい方は▶
<http://www.mushozoku.net/stamp.html>



ご意見をお寄せ
ください!!

Eメール: info@mushozoku.net

※Eメールは共同発行人全員宛てとなります。

越川 雅史(「無所属の会」代表)

市川市新田4-13-2-103 TEL:047-377-5777

文化行政について

「文教都市」市川と使われていた言葉に「住宅都市」が加えられてきている。人口が増加することを良しとする行政の姿勢と思う。しかし、都心のベッドタウンであるとあからさまに表現することに違和感をもつのは私だけであろうか。

江戸時代のおひなさまを蔵から出してご近所の皆さまに公開してくださる方は市川の松の木が通りにある家や門を入ると南天や紫陽花そして路の植え込みを通り奥に進むと石灯籠や梅や松を囲んだ池があり、横にひっそりと蔵がある。蔵に続くお部屋にひな段飾り公開していた。次々に人が訪れ一堂に感嘆の声をあげ住いの100年以上の古民家の縁側やお部屋に坐り、のどかな時を過ごしていた。これこそ市川の文化！奥ゆかしく主張もないのに存在感を感じ、その佇みを愛でる人の温かい眼差しこそ、一朝、夕に育むことのできない市川の品格であり、歴史だと感じた。古いものを維持し、保護するのは、行政の仕事と考えるが、市はすみずみまでは目が行き届かない。しかし、声をあげている人には耳を傾けなければいけないと考える。

市川八幡市民会館も建て替えられ3月にオープンした。ネーミングライツの制度で「全日警ホール」となった。応募は1社で、年間100万円の契約である。「市川の文化の拠点」「文化の発進」と言われる新会館が会社のみのネーミングに多くの市民から納得がいけないと声が届けられた。16億円の市民税で建てられたのに、入り口に大きく表示されたネーミングに、文化的市川らしさの言葉を入れるべきと議会で質問した。他市の文化施設のネーミングライツは300万円以上である。金額の多寡ではなく、文化施設への市民の思いは活かすべきと考える。

(文責C・湯浅止子)

高齢者の皆さん、「市川みんなで体操」をやりましたか？

市川市では平成28年度から「市川みんなで体操」が始まりました。この体操は、高齢者の筋力アップを目的としたもので、週1回以上、重錘バンドを手首や足首に巻き付けて、DVD映像を見ながら、歌をうたいながら行います。

「通いの場」やDVDプレーヤー等の確保、並びに運営は、住民が主体となって行います。市は重錘バンドやDVD等の貸し出しを行うとともに、動機付け支援をはじめとして、体力測定を含む、導入支援や継続支援を行います。

この体操は介護予防や地域づくりにとって重要なことから、花巻市における調査・研究の結果を基に今年の2月定例会で、市の今後の取り組みについて一般質問をしました。市の答弁は、「通いの場」を増やすために、自治会・町会や高齢者クラブ等に対する動機付け支援、及びケーブルテレビ等による情報発信を精力的に行うというものでした。高齢者の皆さん、「市川みんなで体操」をやりましたか？



なお、本件の担当課は地域支えあい課です。

(文責D・長友正徳)

待機児童対策について

本市の平成28年4月の待機児童数は514人で全国ワースト4位でした。平成28年12月の定例会で、6月に策定された受け入れ目標1200人の「待機児童対策緊急対応プラン」の進捗状況を一般質問しました。

小規模保育事業所の設置、いちかわ保育ルームの設置、認可保育園の整備、既存保育園における受け入れ拡大、私立幼稚園における預かり保育の拡大など、多様な保育のニーズに答えるプランでしたが達成率は約70%との答弁でした。

続いて、本年2月の定例会でプランの進捗状況を一般質問したところ、利用者のニーズが高い「認可保育園の整備」は14施設540人で67.5%の達成率でした。しかし認可保育園等とすれば4月までに22ヶ所(687人)で開園する予定との答弁でした。プラン全体では1200人の目標に対し1006人となり83.8%の達成率となります。

今後の進め方の一つとして待機児童の多い市川駅、本八幡駅、妙典駅周辺などの整備を促進するため、保育事業用不動産マッチング事業を行い、情報を運営法人に提供すると答弁しています。

平成28年4月1日に「待機児童ゼロ」を達成した松戸市の状況を調査したところ、松戸駅前に送迎保育ステーションを設置し、バスで新規園に送迎する方法に取り組んだことが成功の要因とされています。

本市では子ども送迎センター及び安全なバス乗降場所の確保や責任の所在等が課題で難しいということですが、再度、検討してもらいたいと要望しました。

「子どもを産み、育てやすい環境づくり」を目指して他市で成功した事例を調査し、本市に取り組めるか検討していきます。どうぞご意見をお聞かせください。(文責E・秋本のり子)